

価値に向き合うチームのための V-TDD（価値ベースTDD）の取り組み

株式会社ベリサーブ 藤田 真広



本日のお題

「価値」

自己紹介

- 藤田 真広

- 株式会社ベリサーブ

- AIQVE ONE株式会社

- 興味：生成AI・テスト・QA・アジャイル・宇宙・新しいこと



自己紹介

• 藤田 真広

- 株式会社ベリサーブ → 技術開発
- AIQVE ONE株式会社 → 人材開発



• 興味：生成AI・テスト・QA・アジャイル・宇宙・新しいこと

「価値」 と 向き合えていますか？

結論: 「価値」 に向き合うための **4 STEP**

STEP 1 :
現状と課題の理解

STEP 2 :
価値の構造化

STEP 3 :
価値とシステムの
全体像の可視化

STEP 4 :
価値受け入れ条件
の実装

チームが理解できる
共通言語を作る

何故、 システムを作るのか

ソフトウェアを通じて
今より良い何かを
提供するため

「価値」

それが、

でも、
向き合うのって大変

なぜか

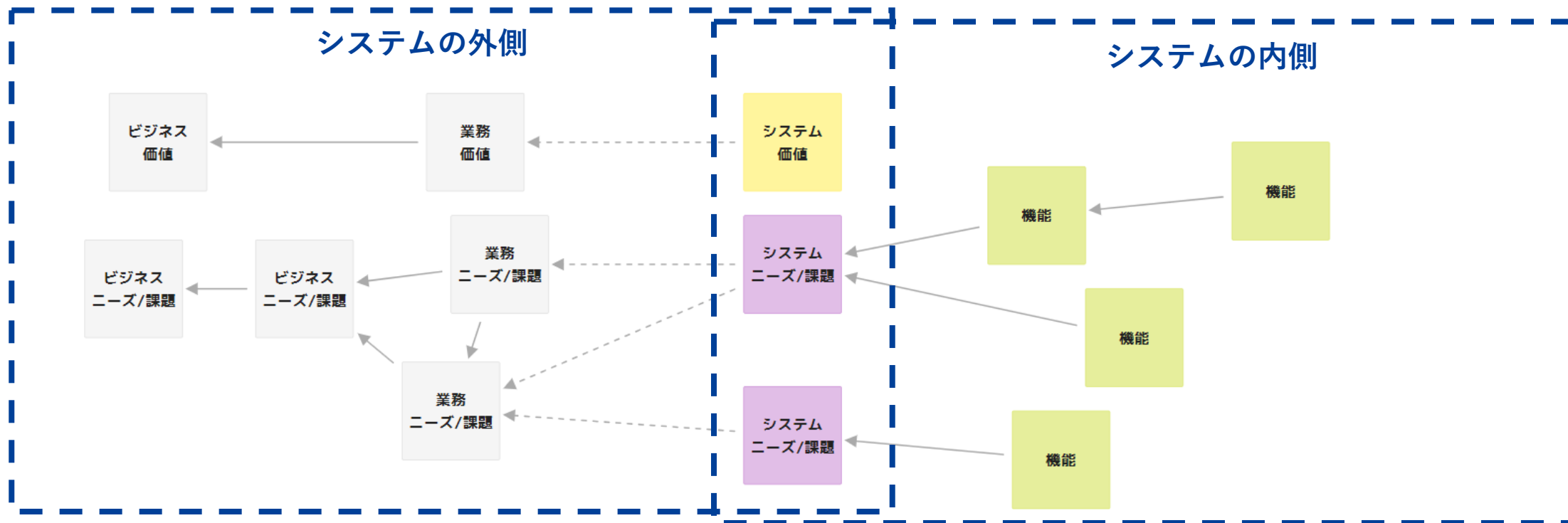
「価値」には
壁があるから

良くある壁の例：

- 「価値」を定義する人と、実際に開発する人との距離が遠い
- 段階的に詳細化された「価値」の末端しか見えていない
- 「価値」の実現手段である機能に目が行きがちになる
 - システムや機能（の中）をちゃんと作ることに目が奪われる（開発）
 - 開発されたシステムや機能をちゃんとテストすることに目が奪われる（テスト）
- 機能を作り込み、システムとして統合した結果、「価値」が実現できない

なんか、こなしがち…

壁をもう少し深掘り



結果、

手戻る、無駄なことをする

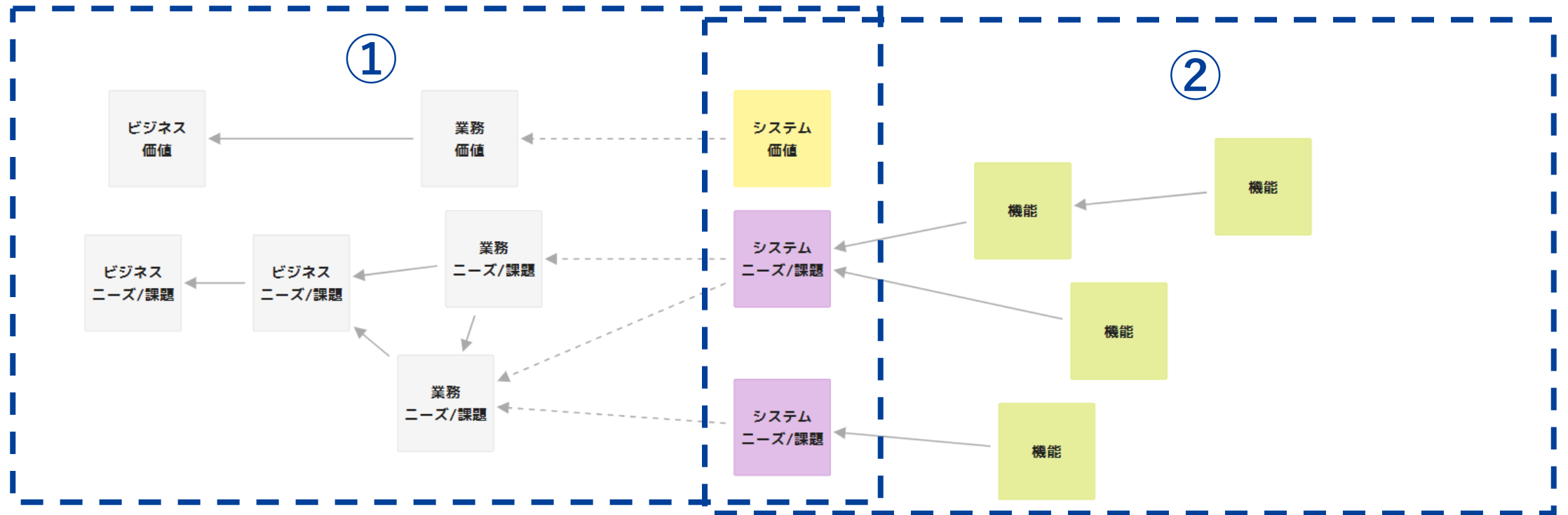
結果、

「価値」が実現できない

解決案

① 価値のモデルで連鎖をつなぎ

② 価値に根ざしたTDDで業務価値と機能をつなぐ



TDDやATDDに関しては参考資料参照

参考資料：「実践ATDD～TDDから更に歩みを進めたソフトウェア開発へ～ / ATDD by genba example」

<https://speakerdeck.com/hgsgtk/atdd-by-genba-example>

解決案: 「価値」 に向き合うための 4 STEP

STEP 1 :
現状と課題の理解

STEP 2 :
価値の構造化

STEP 3 :
価値とシステムの
全体像の可視化

STEP 4 :
価値受け入れ条件
の実装

STEP 1：現状と課題の理解

- 目的
 - 現状をありのまま把握し、課題の構造、本当に解決したいことは何かを明らかにする
- ゴール
 - AsIs 課題構造モデルが完成し、ステークホルダーと課題の構造、その中でもコアな課題について合意できている(=この課題が解決できないとそもそも意味がない)
- 流れ
 - 参加メンバー: PO/ステークホルダー
 - 1. (オプション)現状の洗い出し
 - ステークホルダーが取り組んでいる、現状のビジネスや業務を課題について十分に理解できる粒度までヒアリングする
 - サンプルではコンテキスト、業務フローの各モデルを利用しながらヒアリングを行っている
 - ビジネスユースケースなど、業務の全体像や詳細について理解するために必要であれば適宜モデリングすることを推奨
 - システムを利用している場合は画面や帳票なども適宜用意してもらう
 - 2. 課題の洗い出し
 - 1 と同時進行で、ステークホルダーに課題を出していく
 - 3. 掘り下げ
 - 1,2 を繰り返しながら、その業務を自分が実行したら「確かにこういう課題を感じるな」と思えるまで業務や課題について掘り下げる
 - 4. 課題の構造化
 - AsIs 課題構造モデルに課題を移し替え、構造化を行う

STEP 2 : 価値の構造化

- 目的
 - STEP1 で明らかになったリアルな課題に対して、実現したい To-be を価値の連鎖として表現し、システムが実現すべき価値を捉える
- ゴール
 - To-be 価値連鎖モデルのうち業務価値までを作成し、ステークホルダーとこの価値が達成されればシステムとして価値がある、という合意形成を行う
- 流れ
 - 参加メンバー: PO/ステークホルダー
 - 1. To-be 価値連鎖モデル(ビジネス価値、業務価値)の構造化
 - STEP1 の As-is 課題構造を元に実現したいビジネス/業務の価値を記載する
 - この際、システムや機能(ソリューション)に踏み込まずにありたい姿を考える
 - 考えづらい場合は「何でも出てくる魔法の箱」「望んだ情報が出てくる魔法の画面」を仮定してみると良い
 - 2. コアな価値の特定
 - ビジネス価値、業務価値のうち「この価値が実現できなければそもそもやる意味が無い」というコアな価値を特定する

STEP 3 : 価値とシステムの全体像の可視化

- 目的
 - 実装に近いシステムの全体像を可視化した上で、STEP2 で作成したビジネス、業務価値とシステム価値をつなげる
- ゴール
 - システムに対するステークホルダーのアクション、画面、データ、価値を実現するために必要な要素が UX モデルとして洗い出されている
 - 価値を担保するためのテストが表現されている
- 流れ
 - 参加メンバー: PO/開発チーム
 - 1. システム全体像(UX モデル)の構築
 - To-be 価値連鎖モデルを見ながら、それを実現するためのシステムの全体像を UX モデルで表現する
 - 仕様レベルの議論は STEP.4 で実施し、ここでは価値を実現できているか? そのために必要な機能は何かを議論する
 - 2. To-be 価値連鎖モデルとのつなぎ込み
 - UX モデルの内容を元に To-be 価値連鎖モデルにシステム価値を追加する
 - 3. ユーザストーリーの構築、見直し
 - ユーザストーリー = 業務価値とシステム価値のセットと捉え、ユーザストーリーの一覧を構築する or 既に存在している場合は網羅できているかを見直す
 - 4. 価値テストの構築
 - To-be 価値連鎖モデル、UX モデルを見比べながら、価値を担保していることを検証するために必要なテストをモデルで表現する
 - 価値テストをベースに受け入れテストを作成する

STEP 4 : 価値受け入れ条件の実装

- 目的
 - 各ユーザーストーリーが満たすべき価値を明確にし、システムの設計に落とし込む
またそれを TDD により価値を担保できるようにする
- ゴール
 - ユーザーストーリーごとに(必要に応じて)UXモデルが構築されている
 - 価値につながるテストが表現されており TDD として実装される
- 流れ
 - 参加メンバー: PO/開発チーム
 - 1.ユーザーストーリー単位での抜粋
 - 一つのユーザーストーリーに着目し、関連した連鎖をすべて抜き出す
抜粋することで、前後の関係が分かりやすくなる
 - 2. UX モデルの構築
 - システム全体像(UX モデル)を元に、ユーザーストーリーを満たすためのより詳細な
UX モデルを構築する
 - 3. 価値につながるテストの構築 (V-TDD)
 - ユーザーストーリー、To-be 価値連鎖モデル、UX モデルを元に価値につながるテストを表現する
 - 4. 実装
 - 価値につながるテストをTDDとして実装し、それを満たすように機能を実装する

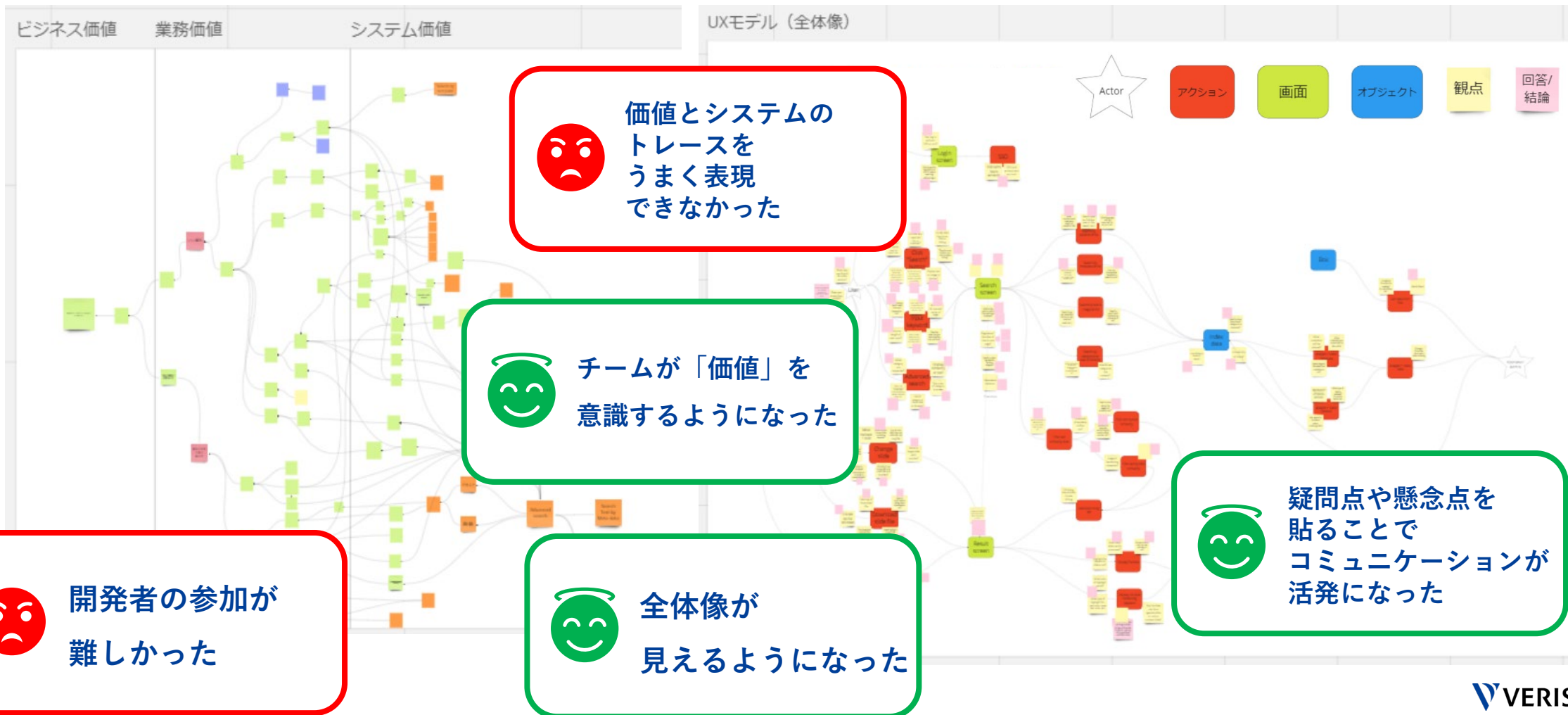
実践してみました

実践プロジェクト概要

- 社内向けファイル検索システム開発
- 実験期間：2カ月（実験内容説明1カ月＋開発1カ月）
- 開発チーム3名＋サポートとして参加
- 実践に向けて、手法の構築やファシリテートで Leviiさんにご協力いただきました



STEP 1 ~ STEP 3



STEP 4



慣れない手法で
V-TDDを作るのが
難しかった



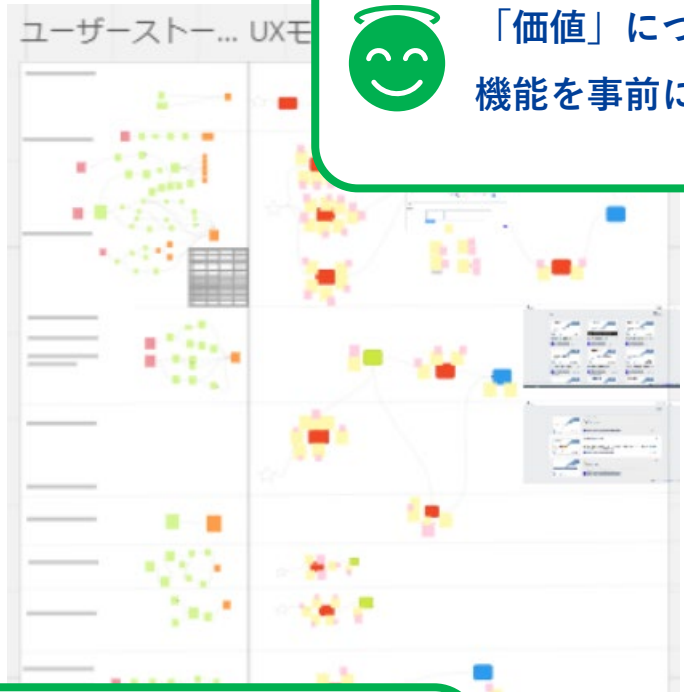
TDDの導入で
詰まるところが
あった



「価値」につながらない
機能を事前に削れた



これを作る時間で
開発したほうが
良いのではという
意見があった



「価値」と機能の
つながりが明確になり
手戻りが減った



画面を置くことで
チームの共通認識
が得やすくなった



何を満たせばいいか
明確になった

まとめ

マネジメント目線では
手戻りが減り良かった

チームに浸透するには
至らなかつた

V-TDDより
手前のところの
効果が多く出ていて
V-TDDの検証があまり
できなかつた

チームのマインド面での
課題が見つかったので
取り組み中

振り返り: 「価値」 に向き合うための **4 STEP**

STEP 1 :
現状と課題の理解

STEP 2 :
価値の構造化

STEP 3 :
価値とシステムの
全体像の可視化

STEP 4 :
価値受け入れ条件
の実装

チーム全体で

「価値」づくりに注力



価値に向き合うチームのための V-TDD（価値ベースTDD）の取り組み

研究企画開発部

藤田 真広

masahiro.fujita@veriserve.co.jp

X : @fujita00td